



TITLE:

<Book Review>Coedes, George, Les  
Peuples de la Peninsule  
Indochinoise, Histoire-Civilisations,  
Dunod, Paris, 1962,pp.228

AUTHOR(S):

前田, 成文

---

CITATION:

前田, 成文. <Book Review>Coedes, George, Les Peuples de la Peninsule Indochinoise, Histoire-Civilisations, Dunod, Paris, 1962,pp.228. 東南アジア研究 1963, 1(2): 81-82

ISSUE DATE:

1963

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/54807>

RIGHT:

考文献がある。引用文献も豊富であり、かつ現地において多数の人々と面接し、充実した記述ぶりである。

項目は(1)戦前のビルマにおける印度人社会の解剖、(2)ビルマ・ナショナリズムと印度人マイノリティ、(3)ビルマにおける印度人労働と移住、(4)マラヤにおける印度人社会の解剖、(5)日本のビルマ及びマラヤ占領、(6)戦後ビルマにおける印度人、(7)戦後マラヤにおける印度人問題、(8)戦後マラヤにおける少数民族ナショナリズムの三角関係などの諸章である。

著者は1933 プーナに生れ、1952 ラジプタナ大学で B.A., 1954 マサチューセットのスミス大学で M.A. 1957 ジョンズホプキンス大学で Ph. D を得た人で International Relations を専門としている。

(棚瀬襄爾)

**Tein: Phei Myin 「a-sei-ga neiwun: the' te bama」 Rangoon. 1960. 3vols., pp. 1192**

現代ビルマ語の表現形式を調べるために、最近、数冊の新刊本に目を通したが、その中で最も印象に残ったのが、ここでとりあげるティンパーミンの「日出づるビルマ」である。この本は、雑誌「ミャワディー」に、四年間に亘って連載された長編小説を単行本として、まとめたものである。

主人公タキン・ティントゥンが、ラングーン大学の学生であった1938年から、この小説は書き始められている。この年は、ビルマにとって、誠に多難な年であった。第一の紛争は7月に発生し、その後各地に広がったインド人イスラム教徒とビルマ人仏教徒との間の宗教的対立であり、第二は、11月に勃発したイェナンジャウンの油田労働者のストと、それに呼応した農民のデモ、そして第三は、それらに続くラングーン大学生の反政府ストである。ストに参加した学生タキン・アウンジョーが、警官に撲殺された事から、ビルマの全産業がゼネストを敢行、遂に反政府運動から、反英独立運動にまで発展した。翌39年、バモー内閣は、全責任をとって辞職、ウー・プ内閣、ウー・ソー内閣、ポートウン内閣と次々に登場した新内閣も、ビルマ国民の排英独立運動の大波を、喰止める事は、もはや、不可能だった。1942年、日本軍は、アウンサン將軍を司令官とするビルマ独立軍と共に、タイから、ビルマへ進撃、6月、ビルマ全土が日本の軍政下に入った。

排英独立を念願としたビルマ国民は、日本軍を歓迎したが、その本質が帝国主義である事に気がつくと、真の独立を求めて、抗日運動を開始するようになった。主人公タキン・ティントゥンが、抗日ゲリラとして、地下活動に入るところで、この小説は終わっている。

全体を概観して感じる事は、この本が、著者の単なる創作ではなく、英国の植民地時代から第二次世界大戦に至るまでの、ビルマの政治的変動を、著者の体験を通して描いた、一種の型破りな「現代政治史」だという事である。現代ビルマ史に関する研究や、ウー・ヌ、ウー・パワー等政治家の自叙伝は、今迄にも、幾つか公表されているけれども、市民生活の一般的描写を通して、その背後を流れる歴史の動きを、これ程見事に、いきいきと描いた本は、恐らく、これが最初ではなかろうか？勿論、小説である以上、或る程度のフィクションは、止むを得ないが、主人公タキン・ティントゥンが、若き日の著者の化身である事は、ほぼ間違いないであろう。アウンサン將軍、ウー・ヌ、タキン・タントゥン、タキン・ソー、ネウィン將軍等、独立後の一流の政治家達の若き日の姿が、随所に見られるのも、本書を、一層興味深いものとしている。

原文の表現は、平易で、文章も、歯切れがよい。話し言葉を、ふんだんに用いた事も、この本を、一層身近かな感じのものとするのに成功している。尚、原題名は、「a-sei-ga neiwun: the' te bama」太陽が、東から昇るのは、自然の摂理であるように、ビルマに、独立の日が訪れるのもまた、当然であるというドーバーマー・アシーアヨンの歌の一節からとったものである。(大野徹)

**Coedès, George: Les Peuples de la Péninsule Indochinoise, Histoire -Civilisations. Dunod, Paris. 1962. pp. 228.**

インドシナを構成する複雑な民族文化を、歴史的な流れの上で把握しようとしたものである。著者は言うまでもなく斯界の権威の一人で、現在極東学院の名誉院長である。Les états hindouisés d'Indochine et d'Indonésie (1948) や Une période critique dans l'Asie du Sud-Est, Le XIII<sup>e</sup> siècle (Bull. Soc. Etudes Indoch., 38, 1958) など著者自身の研究成果を更にその後の研究状況と照らしあわせて、改めて原

住民の起源から20世紀前後までのベトナム、ラオス、カンボジア、タイ、ビルマの歴史をまとめている。

本書は5部からなっている。第1部は、地理的環境と先史時代に於ける文化・民族移動・言語の親縁関係・社会状態などが概括的にとりあげられている。第2部は、インドシナ国家の形成と題して、紅河以南への中国の侵入、数世紀遅れてインド文化の流入によって、扶南、林邑（占城・環王）、暹羅、墮和羅国などの国々が拡張していく6世紀位迄の時期。第3部（6世紀から13世紀迄のインドシナ諸国）では、インドシナの三大文明——ベトナム文化、クメール文化、ビルマ文化の繁栄を描く。13世紀は、インド文化の衰退期で、東南アジア全体に《transvaluation de toutes les valeurs》が起り、インド文化はそれまで保護者であった支配者階級から分離して民衆の中に浸透していき、ヒンズー教や大乘仏教が支配者の宗教となっていくと著者は説明している。この衰退期に元の遠征があって、ますます衰退が進められ、元の征服は、単にクメール帝国、チャム王国、ビルマ王国の風化を手伝ったにすぎず、次には新しい王朝の時代が始まる。この13世紀の政治・文化の状況に第4部があてられている。第5部は13世紀以後の各国史であるが、西欧人接触以後は極めて簡単に述べられているのみで、量的にもこの部は全体の1/3を占めるにすぎない。

結論として、シナ化（ベトナム）とインド化（その他のインドシナ諸国）との基本的相違は、中国は征服により、インドは文化的浸透によって、各々の文化をインドシナに導入した点にあって、両者は量の差異でなく質の差であるという。

大変わかり易く書かれており、最近の文献もかなりあがっているので、インドシナ半島における文化の流れを知る上に手頃な書物といえる。（前田成文）

**Benda, Harry J. and McVey, Ruth T. (ed. and with an introduction by): The Communist Uprisings of 1926-1927 in Indonesia; Key Document (Translation Series, Modern Indonesia Project). Southeast Asia Program, Cornell University, Ithaca. 1960. pp. xxxi + 177**

20世紀初期から独立までのインドネシア民族主義運動史は、1926-7年を境に、二つの時期に分けて考えられる。第一期を民族主義運動の胎動期とするならば、第二期は、純正民族主義を主流とする統一行動確立の時期と特徴づけられる。この意味において、1926-7年は、インドネシア民族運動史上、重要な一時点を構成する。

今世紀初頭における新興インドネシア知識階級の啓蒙運動には、顕著なものがあったが、それは、ともすれば、大衆より分離した運動であった。知識階級の自覚は、大衆にまで伝達されねばならなかった。この役割をイスラムの政治運動が演じている。経済界における華僑勢力や西欧人の抬頭に反対するイスラム中産層は、イスラム同盟（Sarékat Islam）を結成し（1910）、自民族による経済と教育の高揚運動を展開する。幅の広い運動目標に、大衆との絆を象徴するイスラムが結合することは、この運動組織を急速に膨張させ、1919年には、SIの会員数は250万人にまで達している。

しかし、ロシア革命の影響もあり、イスラム政治運動は左傾化する。この傾向に関して、SI左派は、イスラムの指導層と対立、1920年にインドネシア共産同盟を結成する。独立した左派は、当時、未だ大衆組織化の用具として重要な意味を持つイスラムと分離することによって、弱体化し、1926-7年の革命にも失敗して、全面的に後退する。他方、イスラムの政治運動も又、保守革新の主導権争いのために衰退する。このような情勢下において、スカルノを中心とする知識人により、完全独立を標榜する国民同盟が組織されたのは、1927年であった。

本書は、1926-7年における共産革命の社会・政治上の背景を分析した蘭印政府の報告書の英訳である。この報告書は、オランダ政府が公表を好まなかった秘密文書も含まれている。インドネシア共和国政府の許可を得て、コーネル大学の「現代インドネシア・プロジェクト」によって公開されたものである。報告書の内容は、蘭印総督の報告、バンタム報告、スマトラ西岸部報告の三つより構成され、それに本書には、インドネシア政治史家、H. Benda と R.T. McVey の長文の序論が附加されている。この報告書は、単に近代インドネシア政治史の理解のためのみならず、当時の地方のイスラムの情勢や社会構造の理解にとって、極めて重要な資料を提供すると共に、共産革命における